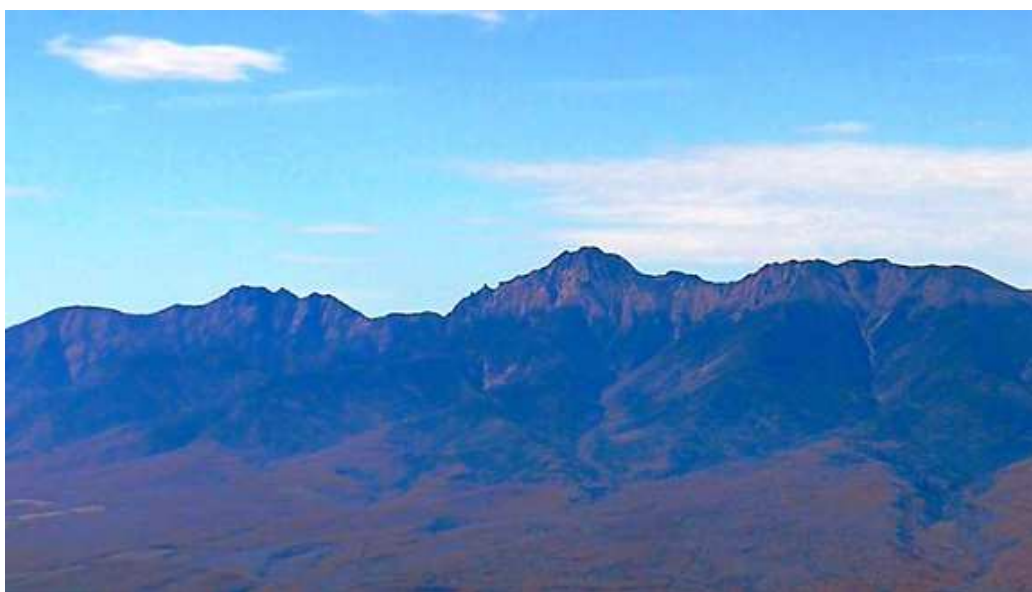


待ってくれていたダケカンバ

2017年11月

人は（人に限らずあらゆる生物は）一生のうちに何度も危ない目に会うが、それを掻い潜って生きている。たいていの人が“あの時は危なかった”と、思い出してぞっとするような瞬間をいくつか持っているのではないだろうか。その瞬間を考え出すと收拾のつきにくい気持ちになるので平素は考えないようにしているが、あいにくと思い出してしまうきっかけはあちこちに転がっている。

百名山とやらを網羅して登る趣味はないが、次はどこに登ってみようかと考えることは楽しい。最近はお眺めの良い山に凝っており、インターネットで情報を集めて御座山（おぐらやま）に登った。長野県と群馬県の境にあり、交通が不便なために登山者は少ないが聞きしに勝る眺望である。11月中旬の快晴、日本列島の中央部にある山は全部見えているかと思うほどの眺めの中、近くの八ヶ岳はひととき大きく見える。平素見ることの多い山梨県側からではなく、長野県側からの眺めなので山の同定に少々苦勞するが、最高峰の赤岳は外さない。そして赤岳の左側に落ちる顕著な岩尾根が目に入る。天狗尾根である。名前のいわれとなったであろう天狗の鼻を連想させる岩峰がよく見えた。天狗尾根だと思った瞬間には50年以上前の記憶が蘇っていた。すぐそばを死神が通り過ぎたときのことである。



当時は大学院の1年生だった。11月の下旬、隣の研究室の同級生と2人で天狗尾根から赤岳を目指した。この時、天狗の鼻の岩峰で落ちた。

10mほどの岩壁を登っているとき、不用意に足を乗せた草付きが剥がれ落ちた。両手が岩から離れていた瞬間だったので成す術もなかった。急な斜面を2, 3回回転しながら落ちて行き、突然に大きな衝撃とともに止まった。気が付く

と、清里側に切れ落ちた高い崖の際に生えていた太い、曲がりくねって横に延びたダケカンバの幹に、腹を下にした二つ折りの形で引っかかっていた。そこは数mの急な草付きの斜面で、その先は切れ落ちた崖になっており霧が流れていた。重いキスリングザックは頭より下にぶらさがり、肩にさしていたピッケルは飛んで崖の際に行儀よく突きささって立っていた。ダケカンバは太く頑丈だった。頭は混乱していたのだろうが行動はおかしいくらい冷静だった。幹から体を離すといったんザックを下して木に固定した。空身で慎重に斜面を降り、ピッケルを回収して登り直した。腹を打ったので少々痛かった。相棒は岩壁の上から黙って見ていたが「どうする？」と聞いてきた。「大丈夫だ。登ろう。」と返した。

目的の赤岳山頂小屋まではまだかなりの距離と標高差である。天候も悪化して飛雪の中、ルートファイディングに苦労しながら、雪のついた天狗尾根を何事もなかった様に黙々と登った。相棒も何も言わない。登ることに集中はしていたが、先ほどの転落をめぐる形容しがたい気持ち・・・その塊のようなものが体の中に育ってゆく。ダケカンバに引っかかった時の衝撃、頭に覆いかぶさる重いキスリングザックを首で押し上げた時に目に入った霧の流れ・・・。山頂小屋に着いた頃は薄暗くなっていた。暖かい食事を作って食べ、寝袋に入るころ相棒が言った。「お前が落ちている間、おれはただただ、ワー、ワーと大声で叫んでいたことを思い出したよ」。記憶では一瞬だったが、その言葉によって相棒も含めたあの時の情景がTVの画面に再生されるように想像された。そこには見えないものの死神がいたのである。ただ、あの時、死神は気まぐれだったようである。木に引っかかった自分を見て、舌打ちをしただけで通り過ぎたのだと思う。

相棒は仲間内、寡黙で通る男だった。何を考えているかよくわからない、という仲間もいた。研究室も異なり、彼はワンゲル部、こちらは空手部であったが共通の登山を通じてなんとなく分かりあっていた。過ぎた夏には、2人で北アルプスの主脈を10日間かけて歩いた。雨の心配がない夜はツェルトも張らずに星空を眺めながら寝た。固いフランスパンに蜂蜜をつけ、水で流し込みながら歩いた。必要なこと以外はあまりしゃべらない山行だったが楽しかった。

寝ようとしたが、うとうととしては目覚めることを繰り返した。何度目かに目覚めたとき、相棒がこちらを見ており「大丈夫か？ 眠れそうか？」と声をかけてくれた。不意を打たれて多少うろたえながら、「おう、心配するなよ」と強がったことを覚えている。そのあとはぐっすり寝た。

快晴の御座山山頂で想いはとめどない。あの時に死んでいても不思議はない事故だった。回転しながら落ちる際に体を感じた遠心力、ダケカンバに引っかかったときの衝撃、我に返ったときに眺めた眼前の景色、崖際にポツンと突き立

ったピッケル。全てが昨日のこのようである。まるで作り物のような場面。あの瞬間、今日のこの日がある確率は限りなく低かったのだ。

ダケカンバがなかったら、落ちる方向が少し違っていたら、死神の意思がもっと強かったら……。違うルートを登っていれば、もっと慎重に登っていれば……。

死神が言うべき「たれば」と、こちらが言うべき「たれば」は、表現は全く同じでも正反対の結果についてのものになる。

あの日、あの場所には死神もいたのだが、幸いなことに守り神もいてくれたのだと思っている。

人の生死にあふれる現世、悪い方に転んでも極些細な出来事であったろうが、当事者の身にとってみれば天国と地獄である。しかし、その後の人生にこの教訓を活かしてきたかと問われれば誠に心もとない。

ジャーナリスト、開高 健はベトナム戦争の際、従軍していた米軍部隊が北ベトナム軍の包囲に陥り、200名中で生き残ったのは17名という修羅場を潜り抜けた。救出された時には、「この経験を活かせば、今後の俺にできないことはない。思い切って生きよう！」と自分に誓ったそうである。しかし、サイゴンで生き残りの米兵と祝杯を挙げているうちに、数杯目のビールでこの決意は揺らぎだしたと彼は書いている。「そして1月も経たないうちに日々の生活に紛れていった」。

世界で最初に8000m峰の登頂に成功したのは1950年にアンナプルナに登ったフランス隊である。フランス隊はその後、1955年に高度第5位のマカルーにも登頂した。この2つの登山で活躍したジャン・クジューは、その後すぐにアルプスの岩壁で落石に会って死亡する。友人で有名な登山家であるリオネル・トレイは彼を悼んだ文章の中でこう述べている。「彼の人生に終止符を打ったのは、その岩壁で長い間彼を待っていた1個の石だった」。

あのダケカンバは長い間、自分のことを待ってくれていたのだろうか。

相棒には卒業後、同窓会などでもめったに会わなかった。体調が悪いそうだ、とのうわさを聞いてしばらくして訃報が入った。70歳ぎりぎりだったろうか。北アルプス主脈の縦走の際には、剣岳の登頂後に剣沢で別れた。彼は剣沢を降りて仙人池へ、自分は大日岳へと向かうためである。すっかり軽くなったリュックサックを揺すり上げながら、「じゃあな」と一言だけ言って、剣沢の雪渓を踊るように降りて行った後姿が今も脛の裏にある。

赤岳山頂の山小屋でかけてくれた一言と、いつも彼が浮かべていた、はにかんだような笑顔とを忘れたことはない。